

二〇一八年読書アンケート

—二〇一八年中にお読みになった書物のうち、とくに興味を感じられたものを、五点以内で挙げていただけますよう、おねがいをいたしました。
編集部

- 佐藤文隆 (理論物理学)
- 1 森本あんり『異端の時代——正統のかたちを求めて』岩波新書、二〇一八年
 - 2 谷川稔『十字架と三色旗——近代フランスにおける政教分離』岩波現代文庫、二〇一五年
 - 3 長谷川漢石『江戸東京実見画録』岩波文庫、二〇一四年
 - 4 臼田孝『新しい1キログラムの測り方——科学が進めば単位が変わる』講談社ブルーバックス、二〇一八年
 - 5 政池明『荒勝文策と原子物理学の黎明』京都大学学術出版会、二〇一八年
- 最初の本は同著者の『反知性主義』(新潮選書)の続編と思って手にしたが、こちらは宗教論であり、最近の政治経済の論壇ではあまり接しない議論で新鮮であり、日本社会を

論ずる際の視点になかったものを気づかせてくれた。現代の議論では「アラブ」異質論として宗教が登場するぐらいだが、谷川本はフランスという近代先進国に「革命」時に織り込まれた対立の種が潜在していることを初めて知った。これが「アラブ」問題に独自に絡んでいることを知った。

「江戸」から「東京」への時代変わり時に、上部の政治体制の転換とは直結しない街に見られた風習、刑罰、学び、娯楽などの実相を挿絵と文章で記したものだ。大正まで長生きした筆者が世の変わりぶりを伝える意図のものだから誇張もあろうが、それにしても世の中の常識は短期間にこれほど変わるものかと驚かされる。終戦直後の混乱期を子供として過したので実感はなかったが、当時の大人も激変を味わったのかも知れない。
自分でも新単位本、佐藤文隆・北野正雄

永田 洋 (地学)

- 1 藤井一至『土 地球最後のナゾ——10億人を養う土壌を求めて』光文社新書、二〇一八年

『新SI単位と電磁気学』(岩波書店)を出したので臼田本を手にしたが、国際的な改定の取り組みに参加した著者の視点はおもしろい。日頃あまり見えない、科学技術インフラ整備の国際協力という活動に注目させてくれる本である。

政池本は京大物理で同僚だった著者の力作である。終戦直後、占領軍に押収された研究室の文書が米公文書館に保管されていることに着目したものが、その動機として押取時に通訳だった米青年の慚愧が出発点にあり、血の通った歴史ドラマでもある。

- 2 西崎雅夫編『証言集 関東大震災の直後朝鮮人と日本人』ちくま文庫、二〇一八年
- 岸政珍『マンガと手榴弾——生活史の理論』勁草書房、二〇一八年
- 3 森本あんり『異端の時代——正統のかたちを求めて』岩波新書、二〇一八年
- 4 井上和男編『クラシック音楽作品名辞典』(第三版)三省堂、二〇〇九年

1 は土壌学の若手研究者による土の啓蒙書。「地球最後のナゾ」はともかく、土ほど一般に知られていない、また、興味を引くことのない「環境」はないだろう。本書は土の世界とその研究の様子をできる限りやさしく、イメージしやすく語ろうと試みているが、それがかえって理解を妨げている面もあることは否定できない。土を語るのには難しい。ではあるが、せっかくの啓蒙書、多くの人に手に取ってほしいと願い、紹介する。

2 は約一八〇編の子ども、文化人、朝鮮人、市井の人々の体験記や記憶、回想と若干の公的資料を集めたもの。それは大震災直後の記憶や記録のごく一部に過ぎないが、それを読んでいきながら「読む」ということについて、あらためて考えさせられる。これについて、岸の「聞く」ことについての理論をめざして編まれた書には(入手して間もないのだが)何かありそうである。

3 を読み進めながら、「正統と異端」とい

う問題設定自体に疑問を感じるようになっていった。それはともかく、藤田省三『異端論断章』(みすず書房)、浅野裕一『儒教』(講談社学術文庫)、小倉紀成『朝鮮思想史』(ちくま新書)などを傍らに読んだが、藤田の書の末尾に次のような応答があるのを記しておこう。

丸山「日本はそういう意味で、欠如理論じゃないけれども、本来オーソドキシイがないところをもってきて、疑似オーソドキシイも崩壊した。そうするとこれは世界でも稀な一世代の短縮現象が起こる。つまり極端に言うところ、一年ごとに「あいつはもう古い世代だ」というのが出てくることになるわけです。」
藤田「そうなる」と「思想的正統」の形成という課題は、ますます困難な事態になっているということになりますね。」

4 には長いことお世話になっている。調べただけでなく、読んで楽しい。ハンディ版でなく大判で、書き込みができるようになってくると嬉しいと老人は思う。

小沢 節子 (日本近現代史)

- 1 張愛玲『中国が愛を知ったころ——張愛玲短篇選』濱田麻矢訳、岩波書店、二〇一七年
- 現在では魯迅と並び称されることもあると

いう張愛玲のデビュー作『沈香肩 第一炉香』(一九四三年)は、甘くて香りのよい糖衣錠のようだ。つい、うっとり舌の上でころがしすぎて中の丸薬の苦味が出てくる前に、飲み込まなくてはならない……。日本軍占領下の上海を舞台に、映像的かつ感覚的な物語が、春の空気の湿り気や主人公たちのコスチュームの衣擦れの音、白粉の香りまで、「現在性」を湛えた細やかで濃密な日本語に置き換えられる。ディアスポラであり、マルチレイシャルであり、ポリグロットである、いくつもの属性を背負った登場人物たちが恋愛/性愛という関係性にとらわれていく。つまり、これは恋愛小説であり、恋愛小説家としての張愛玲の名を世に知らしめた作品なのだろう。だが、恋愛/性愛以上に、人間の個と自由をめぐる「革命」的なテーマなどあるだろうか。時代を超えて問いかけてられている気さえする。つづけて手に取った張愛玲『傾城の恋/封鎖』(藤井省三訳、光文社古典新訳文庫、二〇一八年)では、物語の比重が上海から香港に移動し、登場人物たちも大人となり、甘美な陶酔感よりは痛ましさが募る。彼女の小説には(キリスト教的な)絶対的・超越的な存在は登場しないが、「歴史」あるいは「歴史的な時間の流れ」が描かれているように感じながら、香港爆撃のシーンに山口蓬生『香港島最後の総攻撃図』やグラレナム・

1 森本あんり『異端の時代——正統のかたちを求めて』岩波書店、二〇一八年

神学者による異端論であるが、宗教だけでなく、政治や憲法、文化に至るまでとりあげて論じた、幅広く深みのある一冊である。規範や正典が正統をつくるのではなく、人々の間で広く承認されたものが正統になると著者は言う。「反知性主義」や「ポピュリズム」に流されて、正統も異端もなくなってしまう。現代の状況を改めて考えさせる著作である。

2 ティム・インゴルド『ライフ・オブ・ライオンズ——線の生態人類学』筑菜奈子・島村幸忠・宇佐美達朗訳、フィルムアート社、二〇一八年

『ライオンズ』の続編でもあり、まとめてもあるようなインゴルドの線の生態人類学。今回はライン(線)にプロポ(小さな塊)が加わったことで、世界がさらに柔軟に広がった。地下のジャガイモからタコ、インギンチャク、マティスの絵画『ダンス』まで結ぶ、縦横無尽の弾力ある思考が刺激的である。

3 齋藤桂『1933年を聴く——戦前日本の音風景』N T T出版、二〇一七年

第二次大戦中の音楽についてはすでにかなり調べられているが、これは大戦前の一九三三年という年に起きた様々な「事件」に着目

して、軍国化していく世相を「音」から捉えようとした意欲的な著作。尺八奏者の殺人、自殺ブーム、デモ行進、サイレンなどを通して、日本の音楽史の一断面が鋭く切り取られている。

4 佐藤知久・甲斐賢治・北野央『コミュニケーション・アーカイブをつくらう!』晶文社、二〇一八年

せんだいメディアアテック内に開設された「3がつ11にちをわすれないためにセンタ1」(通称わすれん!)は、市民や専門家が協働して復興のプロセスを記録、発信する活動を行なっている。これは地域の人々が自ら記録・発信するコミュニティ・アーカイブの考え方や手法について具体的に記したガイドブック。草野球ならぬ「草アーカイブ」は、軽やかで自由な発想に満ちていて魅力的だ。

5 岡本章『現代能楽集』の挑戦——練肉工房1971-2017』論創社、二〇一八年

長年にわたって能と舞踏、演劇を媒介する熱き接点を模索してきた演出家の総決算とも言える成果であり、その独特の演出と舞台を思い出しながら読んだ。

江口重幸 (精神医学)

1 益田勝実『日本列島人の思想』青土社、二〇一五年。たまたま相前後して読んでいた

和多里『中井久夫との対話——生命、こころ、世界』河出書房新社。石原孝二『精神障害を哲学する——分類から対話へ』東京大学出版会。田中雅一・松嶋健編の大作『トラウマを生きる(トラウマ研究1)』京都大学学術出版会。松澤和正『精神看護のナラティブとその思想』遠見書房。岡安裕介「心はいかに伝承されるのか」柳田国男の夢分析を手がかりに『伊那民俗研究第25号』47-69頁。

三島憲一 (ドイツ思想)

1 チョン・スチャン『羞恥』斎藤真理子訳、みすず書房、二〇一八年

北朝鮮から、「南朝鮮」(本書では「韓国」の代わりに意識的にこの言葉が使われている)に逃げてきたいわゆる脱北者のその後の生活が表面上の主題。皆、逃亡の途中で家族を亡くしている。生き残った者のつらさ、死んだ家族への思い、中国で「慰安婦」にされている妻への自責感。それでも最底辺の工員をしながら、差別に耐えて生きていかねばならない南での生活。おりから平昌の冬季オリンピックに向けての工事による好景気。そこで発見された朝鮮戦争当時の虐殺に由来するらしい大量の遺骨。国による都合調査。工事反対運動。そうした流れに巻き込まれながら冷ややかに離脱する脱北者。結局三人のう

三冊の文庫、佐々木喜善『聴耳草紙』(ちくま学芸文庫)、柳田国男『明治大正史世相篇』(平凡社東洋文庫)、鈴木牧之『北越雪譜』(岩波文庫)の尋常でない緊張感を持つあとがきや解説が、同一著者益田によるものであることに気づき、本書にたどりつく。ふだんは読むことがない領域であるだけに、想像力を大いに刺激された。

2 芳賀日出男『写真で迎える折口信夫の古代』角川ソフィア文庫、二〇一七年。芳賀のこの民俗学の文庫シリーズでは、いずれも息をのむような貴重な写真がふんだんに掲載されている。映像を追って眺めていくだけで折口や民俗学の入門編として十分楽しめる。我が家の近くの王子神社でこんな神事があったのを発見しただけでも大収穫であった。

3 金菱清(ゼミナル)編『呼び覚まされる霊性の震災学』3・11 生と死のはざま——新耀社、二〇一六年。リチャード・ロイド・パリー『津波の霊たち』3・11 死と生の物語』濱野大道訳、早川書房、二〇一八年。昨年中盤は、必要があって東日本大震災をめぐる聞き書きを続けて読むことになった。全部挙げるとそれだけで五冊を超えてしまうので二冊のみを挙げる。いずれもよく踏み込んで聞き取ったなあと感心させられた。とくにパリーの著作では驚くべき事例が記されていて読み入ってしまった。

ち二人は自死をとげ、娘のいる一人だけが、差別の中でなんとかこれからもやっていけそう。怨念、恨み、心の疼き、死んでも浮かべれない魂、こうしたことにこだわるのが抵抗であることを教えてくれる。朝鮮戦争期の虐殺の過去から逃げられない主人公を扱ったファン・ソギョン(黄哲映)の『客人』(岩波書店、二〇〇四年)と似た浮かべられない霊のモチーフ。

2 文在寅『運命——文在寅自伝』矢野百合子訳、岩波書店、二〇一八年

現職の韓国大統領の自伝。もちろん、あとがきとは違ってゴーストライターが手伝っているのだろうけど、ともかく面白い。人権派弁護士としての活躍や保守派政権への義憤も迫力があるが、極貧の環境から進学した、学生時代の万能ぶり、そして韓国軍空挺部隊での活躍など、何をやってもできる人。よくありがちなように、世の中の仕組みがわかるとともに柔軟になり、妥協と順応に向かうのではなく、批判と抵抗を忘れないで、政治を動かしていくところがすごい。「出世物語」よりも、細部に気をつけて読むと、政界や役人の世界に關して、日本との共通性や差異を学ぶ勉強にもなる。軍隊で二つ年齢が上なことがどれだけの意味を持つかなど儒教社会の共通性も考えさせられる。日本の官僚制度における入省年度の重要性と比較可能。

4 岸政彦『マンガと手榴弾——生活史の理論』勁草書房、二〇一八年。当初質的調査、生活史研究とは何かを学び直すつもりで読みはじめたが、その巧みな語り口から、沖繩の人々の生活世界に一気に引きずり込まれた。まぎれもない傑作である。同じく沖繩をフィールドにした民間ヒーローをめぐる民族誌、東畑開人『野の医者』(二〇一五年)も相前後して読んだが、これも著者以外誰も書けそうもない、疾走するとき文体で現在を切り取る実にスリリングな著作であった。

5 小堀嶋一郎『死を生きた人びと——訪問診療医と355人の患者』みすず書房、二〇一八年。著者の淡々とした記述のうちに、終末期や在宅医療の現状や問題点を垣間見せてくれるすばらしい書物。Eテレの特集番組「在宅死」の映像も重なり、日常生活の中に病いや老いや死をめぐるいまだ未踏の広大な領域があることを改めて教えられた。臨床やケアに携わる友人や知人の多くに勧めることになった、昨年度私が読んだ書籍のベストワンのである。

さいごに、昨年も師や知人や友人の著作や論考に大いに刺激された。その一部を記す。マーガレット・ロック(坂川雅子訳)『アルツハイマー病の謎——認知症と老化の絡まり合い』名古屋大学出版会。村澤真保呂・村澤